

「これからもくじけずにいっしょうけんめい勉強しなさい。お前たちはもう一度越後へ行きなさい。わたしがよく頼んでおいたから安心しなさい。くれぐれもしつかりやるがよい。」

と、よくよく言い聞かせた。会津を出てからずっと世話になった人と、別れなければならぬと思うと、健次郎の胸には、ぐつと熱いものがこみ上げてきた。いっしょに、長州までついて行きたいとも思ったが、どうにもならなかつた。

二人は、東海道を行く恩人奥平を、品川の宿場まで見送つて別れをおしんだ。

再び越後での生活をはじめて、しばらくたつたある日、二人のところへ、会津藩から手紙がきて、

「会津藩でも、東京で、子どもたちに学問を教えることになった。すぐ東京に
来い。」

と書いてあつた。二人はとび上がつて喜んだ。さつそく、仕度を整え上京した。